

PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

おかあさんのたからもの

おかあさんに

「おかあさんのたからものはなに」「ときくと

「まあくん」とっちゃん」といいます

だから ぼくが

「おかあさんのいのちよりだいじ」とゆつと

おかあさんは

ぼくとおにいちゃんをだきしめて

「うん」といいます

ぼくはとってもうれしいんです

ながた・まさひと

(子どもの詩)

「耳に貝をあてると海の音」

「おはよう、赤ちゃん!」



久し振りに知人に電話すると、「実は、今、妊娠三ヶ月の終わり頃……」という返事。

先日、二度目の検診に行つて、体内の赤ちゃんを見せてもらったら、もう、小さな手や足ができていて、ぴくぴく、ぴくぴくと動いているのだそうです。今まで、赤ちゃんの存在にそれほどの自覚はなかったけれど、自分の体内で成長している赤ちゃんの姿を知つて、とても感動したとのこと。そして、それからは、お腹の中の赤ちゃんに向かつて、「おはよう」とか、色んなこと話かけているのだそうです。

私も電話を切る時、「私がヨロシク言っていたと伝えてね。」と、赤ちゃんへのことづつてを頼みました。「赤ちゃん、9月に会えるのを楽しみに待つてるからね」

あおきのぶこ

報いのある関係

《神の賜物と召し出しとは変えられることがない》

ローマ人への手紙11:29

「ペアレント」誌の最近の調査によると、もし人生をもう一度繰り返すならば、現在親になつていている人の63%が今と同じ数の子供を持ちたいと思つていいる。一方28%の人はもっと多くの子供を持ちたく、また現在子供を持つていない人の73%は子供が欲しいといつていいる。

ある社会学者は、これは「大きな責任、類のない親密さ、多大な時間と労力の投資が要求される関係である親子関係は、同時に報いの大きい関係であると私たちが感じていることを意味しているのである。」といつていいる。

国内ニュース

「許されていい？」

実際、中絶といつても、20週を超えるようなものはほとんど出産と同じ。5年前からは、子宮収縮剤のプロスタグランディンが使えるようになったため、生きてスルツと出てくる。「心臓がピクピク動いている」と、厚生省の担当官は説明する。「正直いって、気持ちのいいものではない。普通は数分で動かなくなりませんが、なかなか死ななくて、そつと濡れたガゼを口に当てたなんていう話も聞くんですよ」と、都内の若手医師は話す。

「中絶をする女性が、産声を聞いてショックを受けないように、直前に麻酔をつつ配慮が必要」と心得を教えてくれた医師もいた。

朝日新聞 WEEKLY
AERA NO9 『嵐の中の胎児』より

国際ニュース

『中絶論争、ドイツで白熱化』

ドイツでは中絶賛成派の考えがここ何年もの間にわたって勢力をふるってきたが、最近になって反対派の動きが目立つようになり、賛成派反対派の間で中絶問題をめぐ論争が白熱化している。この生命の権利をどう解釈するべきかを争点とする論争は、立法議会、法廷そして報道関係を巻き込んだの騒ぎにまでエスカレートしている。

西ドイツの憲法においては、まだ生まれていない子供も生命を所有するという内容が唱えられているものの、一方では妊娠三

ヶ月までの中絶が第218項として知られる中絶法において認められている。今日、西ドイツにおける出生率は世界でも最も低い数値を示しており、妊婦の20%の数が中絶という結果に終わっているという。中絶の理由として増えているのが経済的問題、社会的体制といった問題だ。

中絶賛成派は、この白熱化した反対派の動きに対応するため、218項として定められている中絶法からいくつかの規制を取り除く等を行った。しかし一方、反対派はこの中絶法の合憲性自体を問いかけている。

『ベルギーにおける中絶に新しい波』

「中絶は法律で正当化されるべきである。」ベルギー上院委員会は議会に正式に申し入れた。この申

し入れの詳細は、「妊娠三ヶ月まで、その後も妊婦の身体的あるいは精神的状態に応じて必要であれば、事実上中絶を認めるべき。」というものである。この立法化を是認するべきかどうかの討議は、まずはベルギー上院で行われ、その後下院に送られる予定。

ヨーロッパ諸国において、現在中絶が法律において禁止されているのはベルギーとアイルランドのわずか二カ国だけである。

ベルギーにおける中絶に関する法律の歴史は一八六四年に遡り、その内容は、中絶を行った医師には15年の拘禁の刑が処せられるというものである。しかし、実質的にはベルギーの法廷にはこの法律の実施を行っていない状態だ。ベルギー初の中絶病院は、一九七五年誕生し、その頃はまだ中絶反対の声はなかった。現在15の同様の病院が開業しているが、そこ

において行われている中絶の数は日におよそ一万五千から二万件にまで昇ると言われている。

『アルゼンチン大統領中絶反対提唱』

中絶阻止をその政綱の一環として唱え、昨年アルゼンチン大統領に就任したペロニスト・カルロス・メナム氏は、アルゼンチンにおいて中絶を法律として正当化することは断じて阻止する姿勢を示した。メナム大統領はまた、国の憲法の概説の中に、中絶反対の意向を示す条項を登場させることまで約束している。

「中絶を認めるということは、アルゼンチン国民の深い信念や価値観まで侵害することになりかねない。中絶に関する憲法の改訂にこれから取り組んでいくつもりであるが、最終的

には、人間の生命は受胎の瞬間から始まるとみなして、憲法で胎児の生きる権利を保障するようにしていきたい。「メナム大統領は、彼の中絶問題に対する政策をこのように述べた。

ちよつと待って！

厚生省から出された、中絶期間2週間短縮をめぐって、昨年「ちよつと待って」中絶できる時期の短縮のシンポジウムが東京で開かれ、参加者達は次のように訴えた。

「女性の健康や人生に深くかかわる法律や政策を決める時は、当事者である女性の立場を最優先に考え、メンバー（優性保護部会）の半数は女性の医師や現場を知っている女性にしてほしい。」

（朝日新聞1989.12.1付）

しかし、ここでは、誰も『生きている胎児』の立場には立っていない。胎児の生きる権利、人権は、誰が守ってくれるのか？

（プロ・ライフ）



ABORTION

QUESTIONS & ANSWERS

問題点

中絶論争の全てにおいて、まず問われなければならないのは、「これは人間の生命であるのか。」あるいは「人間の生命はいつを指しているのか。」ということである。これらの問題に答えるには、われわれはまずこの論争に使用される言葉と、その重要性について了解しておかなければならない。

『生きている』を

定義する

生きているとは、その生物が成長し、発達し、成熟し、自分の滅びかけた細胞を交換しているということである。それは死んでいないという状態を意味する。

「人間」を定義する

人間とは、人類という種に属する生物学上の生き物の一つである。この生物は、全ての細胞に46の人間の染色体を有するという点で他の生物と異なっている。これはウサギ科やニンジ科には属さない。

「人」を定義する

人という言葉は、定義をする分野や学科によって何十通りにも定義することができ。神学においては、普通魂が創られた時を意味し、法律（米国の場合）では出生児を人の始まりとしている。他の国々ではそれぞれ違った年齢から始まるものと定め、医学や自然科学の場合はたいいてその生物が存在し完成した時を指している。哲学では、それぞれの意味の差

を持ちながら沢山の解釈がある。

この言葉は、まず何を意味するのかを明確に定義することなしに使うべきでないことを強調しておく。そうしなければ、人について論議することは全くばかげたことになってしまうからである。

これは人間の生命であるのか・・・

これがまず考慮し、熟考し、討論しなければならず、最終的には答えを見つけ出さなければならぬ問題である。この問題は払いのけたり、無視したりすることはできない。それを直視し、公正に対応して行かなければならぬのだ。中絶問題の全てがその解答次第で決定され、それ以外の全ての事柄は取るに足らないものへと色あせてしまうのである。ある意味では、それ以外のものはどうでもよくなってしまうのだ。中絶をしようとし

ている母親の胎内で成長しているものが人間の生命でないとするれば、それが単に組織の一部・原形質の固まり・に過ぎないとすれば、それは関心を向けられたり熟考されたりするだけの価値をほとんど失い、主な関心事はその母親の肉体的・精神的健康状態、社会的安定、そして時には彼女の都合にさえなってしまうのである。

だが、もしこれが人間の生命であるならば、そこでわれわれは2つ目の問題に直面することになる……それは中絶の全ての是非を決定するものである。

2つ目の問題とは何か

それは、「人生の始まりから年老いて死に至るまでの間、この国の全ての人に法の下に平等な保護を与えるべきかどうか。」ということである。

あるいは、「生存する人

間の全ての階級を法の下に差別待遇を……運命的にするべきかどうか。」である。母親の胎内で成長を続けるまだ生まれずにいる胎児は、人間の生命なのだろうか。この判断は、最大限の配慮と科学的な正確さと公正さをもって下されなければならぬ。それによって、将来における人間の生命の根本的自由の多くが決定されるのである。(続く)

女性と中絶の悲劇

妊娠し、子供の父親や自分の家族の支持を得られない女性は多くの場合中絶をする。過去においてもそうであったが、中絶が簡単に受けられ、社会的に受け入れられている現代においてではさらにそうであると言えよう。

私たちの社会は中絶を簡単にした、少なくとも手術を受けることを簡単にした。しかし、それほど簡単だろうか。身体的、精神的苦痛をほとんど、または、全くなしに中絶手術を受ける女性もいるが、多くの女性が自分の中絶の経験について話すにつれ、中絶賛成者は信じられていくよりもずっと少ないということが明らかになってきた。

なぜ、同じ状況にある他の女性が、自分の子供のために生命を選択するのだろうか？三人の女性に自分の経歴を語ってもらおう。

《Aさん》

私は大学生だった。友達も私もみんない知探求と輝かしい愛と自由を求めて大学にやってきた。

中絶を受けることがその人の最初の重大な決定だったと言う女性もいるが、私にとっても、友達にとってもそうではなかった。ボーイフレンドと寝たきり、一緒に住むことは重大な決定であり、大きな変化をもたらした。しかし中絶を受ける決定は難しくなかった。もし問題のある妊娠をしたならば、当然のように中絶を受けたもの

だった。

私はそのことを驚きを持って振り返る。なぜ「当然のように」だったのだろうか。

思うに、決定的な要因というのは自分達を良い人と自分で思いたく、見せたいことであった。「良い」女性には、ボーイフレンドを結婚へと追い込まない。「良い」娘は、両親に心配をかけるまいし説明の必要な行動を取らない。「良い」人は、ボーイフレンドや両親や友達など周りの人に迷惑をかけない。

だから、私は自分が妊娠していると知った時、考えもせずに、正しいことをしているのだと思って中絶するための病院を捜した。簡単に見つかった。私は悲しみも、恥ずかしさも、何も感じなかった。少しづつ、感情が戻ってくるに従って、私や友達は何をししているのだろうか、と思いだした。どのような世界を

作り上げているのだろうか？ 私たちは間違った世界を、母親が自分の子供を殺してもたいしたことがない社会を作り上げていたことがわかった。

後に友達の一人が妊娠した。私は彼女に中絶をしなくてもよいと、他に方法はあると言った。彼女は感激した。彼女にこんな事を言ったのは私だけだった。しかし、私一人だけのためらいがちの主張では十分ではなかった。彼女は中絶手術を受けた。

その後何年間、私の年代の人で中絶手術を受けた人と話をして、多くは誰かが彼女らにこんな事をしなくても良いのだと言って欲しかったと言った。違いはあったかも知れないと言った。

私は妊娠した時、世界の終わりであるかのように感じていたのを思い出す。ボーイフレンドと別れた時も世界の終わりかのように

うに思えた。私は皆と同じようにそれを克服し、そしてもし私が自分の力を出していたら、妊娠も続けて行けただろうと思う。今日中絶のための診療所に行くのと、どのようなカウンセリングを受けるのだろうか。あなたは強いのであり、妊娠を続けることによって良い人生を諦めなくてもよい」と何回も言われるのだろうか。

子供を生むことを選び、そして子供を育て、または養子に出すことはより難しい選択だ。必要のない『誰か』と取り組むよりは、迷惑をかけるその人を殺してしまっただ方が簡単なように思われる。しかし私たちは価値のあること、人類の価値を高めるために生きているのではないか。私は安易な道を選択してしまっただけを後悔している。

《Bさん》

私は少女だった頃、美しい物、子供のいる幸せな家庭、そして何より大切にされて、愛されているという実感を与えてくれる王子様のような人を捜していたのだと思う。この王子様のような男性に会った時、私は彼が私を認めてくれることに得意になり、それを保つためには何でもしようと思った。間もなく、彼の目に写る私だけが自己のイメージになった。

私たちは結婚し、妊娠した。これは私に取っては素晴らしいことに思えたが、いつものように私がどのように思うべきか彼に聞いた。

彼は子供を私たちの人生にとって邪魔者だと見なした。もし私が『安全で合法的な』中絶手術を受けなければ私たちの関係は暗礁に乗り上げることが

はつきりさせた。私は彼と子供のどちらかを選択しなければならなかった。私は彼を選んだ。

まだ麻酔がきいている時、私は白い空間に独りで、誰とも接触がなく残されてしまった夢を見た。しかし手術が終わり、目が覚めた後、今や命のない残骸となった子供に対して後悔しなかった。私は自分にとって最も幸せになる道を選んだと思った。

しかし日が経つにつれ、空虚感と孤独感が強くなった。私の心は夫から離れるようになっていった。彼が出張に出ている時、私は愛人を作った。その後すぐに私たちは離婚した。それから私は愛と存在感を求めて多くの男性と関係を持った。私は無感覚になつた。自殺の思いがたびたび頭をかすめ、男性との関係はますます誠実でなくなつた。私は再婚した、本当に良い人であつ

た、しかしそれでも私は不完全で目的がないように感じられた。新しい男性を通して慰めを得る癖があまりにも強かったので、私は新しい夫を愛していたにもかかわらず、愛人をつくり、彼を裏切った。

私が再び妊娠した時、子供は夫の子供ではないと知っていた。違う男性の子供を産むことが怖かった。結婚への反動とこの不義の関係が発覚することで家族へもたらず恥を大変怖がった。私は結婚を続けるためにはこの子供を墮すしかないと思つた。

中絶手術の身体的な痛みはそれほどでもなかったが、大きくなる喪失感の痛みを抑えられるものは何もなかった。ある夜私は何時間も激しく泣き続け、誰も私を慰めることができなかつた。私は自滅的であり、自分でも分かっていた。

私は教会にも通って、良
い人として行動してきた。
しかし私は神と距離をお
いていた。

私はあまりにも絶望し
ていたので神にも助けを
求めることができなかった。
しかしその最も困難な
時期に、神は夫の心に語り
かけ始めた。夫の心や行動
に現れた驚くべき優しさ
を通して、私は神が私たち

《Cさん》

できた。今日、私は神から
溢れるように受けている
愛そのものを夫にあげる
ことができる。この愛は二
人を自由にし、私たちがな
りたいと思っていた利己
的ではない人にさせてく
れる。恐れは死を与える
が、愛が、愛だけが命を与
えると、今、分かっている。

と分かった。私はますます
神と接して、特に無実な子
供たちの生命を奪うとい
う私の自分勝手な行動の
過ちが分かり始めた。夫は
同情と理解をもって接し
てくれ、私たち二人で見つ
けた新しい信仰を分かち
合った。私は神の私への愛
と許しが分かるにつれ、私
は支えと自分の価値を求
めるのに夫に頼りきらな
くても良いと分かっとき
た。私はこれら全てのもの
を神との関係で得ること
ができ、持ち続けることが

私はボーイフレンドと
大学で会った。私たちは一
緒に祈り、ミサに与ってい
た。しかし、私たちは寝る
べきではないとは思わな
かった。大学の3年生だっ
た時に、妊娠した。

結婚は考えていなかった。
妊娠だけが結婚する理
由になるとは思っていな
かった。それに、彼は私と
結婚しようと言ってくれ
なかった。

私はプロ・ライフの運動
に積極的に参加していた
のに、中絶手術を受けるこ

とを考えていた。私は両親
に妊娠したことを言わな
くてもすみ、彼らが傷つ
き、怒らなくてもすみだろ
うと思った。

しかし、どうしても私に
はできなかった。学期が終
わり、残りの妊娠の期間を
違う町で過ごした。私は早
くから自分の子供を養子
に出すことを決めていた。
これに備えることは、とて
も難しかった。しかし、神

父様は、自分の子供を他人
にあげると考えるのでは
なく、できる限りの良い方
法で子供の世話をしなさ
い。」と言った。

もし子供が養子になっ
たら、お父さんとお母さん
がいるだろう。養子に出す
のが子供にとって公平で
あった。その思いが行動の
原動力となった。

私は子供を産むために
遠くへ行った。みんなに知
られたくなかった。後で分
かったことだが、友人の何
人かは、この子供を産む私

の決心に賛成してくれな
かった。なぜ私が子供を墮
さないのか考えられな
かった。あたかも『罪』は
結婚外の性交ではなくて、
それは彼らも行っていた、
『罪』は妊娠している事で
あるかのようだった。

女性が中絶を受ける理
由といくつかは同じ理由
のために、私は子供を手放
した。私は子供を欲しくな
かった。私は学校を卒業し
たかった。私は仕事をした
かった。息子を養子に出す

私の決心に賛成してくれ
ない友人が多かったのも
知っている。もし「なぜ自
分の子供をあげられるの
か」とか育てたらいいじゃ
ない、助けるわ」と言う人
に困まれていたらより難

しかったかも知れない。彼
と私にとって最良の事を
しているのだと確信して
いたにもかかわらず、私は
多くの妊娠している女性
のように子供を手放した
くないと強く思った。

妊娠期間中、私は自分の
中で大きくなる子供を意
識しようと思ひ、私たちの
関係は短いことを思っ
ていた。私は祈り、子供と話
したり、歌うことに時間を
かけ、できるだけ豊かな関
係を作ろうとした。

しかし生まれたばかり
の赤ちゃんと別れること
を覚悟することは、死を覚
悟するようなものである。
よく泣いた。しかし、神の
愛の力を強く感じた。その
時は神の守りの中にいる
ことを感じた。

養子に出した直後は大
変苦しかった。「新しい両
親がひどい人だったらど
うしよう、交通事故で死ん
だらどうしよう」などと心
配した。

悲しみの後に、満足する
時がきた、私は二度と子供
を見ないだろうが、決して
息子を忘れはしない、私は
自分の決心に満足してい
る。

この三人の女性は私たちが聞く耳を持たなければならぬと教えてくれる、私たちは新しい生命を受胎し、育て、また育てなかつたことにより人生が変わつた女性や男性の話

を聞かなければならない。私たちの人間の生命をつくり出す力に対して責任を持つことは容易ではない。しかしこの性的エネルギーや力を正しくコントロールする努力を通してこそ私たちは脅迫観念や自己中心から解放される。

Aさんが自分の非合法の中絶手術の話で指摘したように、女性はいがい倫理的な決定を下すには無理な危機的状况に立たされている。両親や周囲は彼女達を少女の時から成熟した倫理に基づいて行動するよりも、自分達や子供の名誉を強調し、『良い子』で、協調性のある子にしようとする。

中絶を受ける決定を下

す時にしばしば見落とされるのが男性の役割である。ボーイフレンドや夫に父親の不便さを味あわせたくないという思いが女性に胎児を殺させる。

合法的な中絶の選択肢は『選択権』。中絶を受けるとか受けないかを選ぶ自由であるにもかかわらず、中絶を受ける女性の状況はたいがい『選択の余地なし』である。必要なのは目に見える現実の支

持だけでなく、希望と勇気づけと尊敬の気持ちである。Aさんが述べたように、正しいことをしたい強い女性が一人いても十分ではない。結婚生活における性的な愛に関して神の計画を重視し、男女にこれを促す社会が必要である。女性が妊娠によって教育やまともな仕事を得る機会を失わないと約束する社会が必要である。子供は両親だけの子供ではなく、私

たち全体の子供であると

言える社会が必要である。合法的な中絶を支持する人は確実にそのような社会を否定する。

困っている妊娠中の女性を助けるプロ・ライフとしては中絶という暴力的な解決法を否定しなければならぬだけでなく、情報や教育の計画を通して女性や男性の選択権を知らせなければならぬ。中絶を否定し、生命をつくり出す力を尊敬すること

を助けなければならない。どの女性も中絶以外は道がないと、思うことが決してないように献身的な支援と物質的な援助を与えなければならない。カウンセリングと和解を通して中絶の後に残る精神的、宗教的な傷を癒すのを助けなければならない。公共の政策を変える活動を通して、生まれる前の子供を殺すことを許し、支持さえする法律体系から女性と子

供を守るために努力しなければならぬ。

生まれる前の子供の権利を守ることは女性の利益に反することではない。反対に中絶は女性を一人で問題に直面させ、男性や社会に逃げ道を与えた。選択権を主張する人々はAさん、Bさん、Cさんのような女性の話を聞くと当然困惑する。このような話は中絶の悲劇を正しく理解するための大切な要素を含んでいる。解決への鍵は一貫した人間の生命の遵守と人間の尊厳の遵守にある。

ジュリー・レッシュ著

《事務所だより》

春です！生命の躍動を感じる春です。暖かな日差しに生まれただけで、生きている喜びがあふれてくるようです。いのち、生きとし生けるもの、すべてのいのち、いとおしく……。よろこびは思いがけないところに、ひっそりと……。

よろしく！

プロライフに新しく三人のスタッフが加わって下さいました。ニュース作りの充実や、実質的な動きも少しずつ計画、実行してゆけると喜んでいきます。また家族全員でボランティアをして下さるといいう一

家にも恵まれました。ボランティアを求めています。

プロライフNewsを配つてくださる方……地域の

人々や病院、学校、幼稚園、
社会福祉団体：などに
ニュースをPRして下さ
い。あなたの小さな力が、
この運動の大きな活動力
につながってゆきます。ど
うぞよろしくお願いいた
します。

4月10日

プロ・ライフ・

ムーブメント

スタッフ一同